

救急救命士の厳しさと過酷さ

プロフィール

江津邑智消防組合

青木透

年齢：32歳

出身：島根県江津市

専門学校：神戸医療福祉専門学校三田校 救急救命士科第2期

平成12年卒業

救急救命士資格取得：平成12年

消防士拝命：平成15年

趣味：魚釣り・ジョギング・妻と子供と一緒に料理を作ること



初めに

皆さん初めまして。今回、月刊消防という私にとっての愛読書に執筆させて頂けるということで、正直嬉しくもあり少し不安な思いで一杯です。今回は、私が消防に入るまでに経験したことや、消防に入って体験した症例をもとに、現場の厳しさや過酷さについて書いてみようと思います。私は専門学校を卒業し、消防職員採用試験に合格するまで、約3年間のブランクがありました。皆さんの中には、私と同じような経験をされる方がいるかもしれません。そんな私の人生ですが、今までに経験し感じたことを書くことによって、これから育って行かれる皆さんの心に何か少しでも残ってもらえれば幸いです。

☆「救急救命士」との出会い

私が救命士を目指したきっかけ、それは曖昧な理由でした。高校3年生の時、

医療関係への進学を考えていた私がふと図書室で目にしたパンフレット。そこには、救急車に乗り活躍する隊員の姿が描かれていました。救急救命士？（絵）初めはどんな職業なのか、どうすればなれるのか等全く分かりませんでした。

もともと、幼少の頃から友人の死や身近な方々の死をきっかけに医療関係の仕事に就き、困っている人の力になりたいと考えていた私にとって、「救命」という言葉が、パンフレットを見た後もずっと頭の中に残り気になって仕方ありませんでした。パンフレットとの出会い、そんなきっかけで救急救命士学科への進学を第1希望とし、無事入学することができました。

☆専門学校での生活・就職活動

初めて県外で生活することに対する不安に加え、聞いたことのない講義内容や実技等、理解に苦しむ日々でした。寮生活をしていた私の部屋は、学校が終わると友人達のたまり場となり、同じ目的を持った友人達と夜遅くまで語り合い、私にとってとても心地の良い場所となりました（絵）。

ある時、友人が「救命士ってどこで働くん？消防署しかないのかな？病院とか？」と聞いてきました。よく考えると自分自身そんなこと考えたことはありませんでした。「救命」という言葉に惹かれ専門学校に進学したのは良いものの、ましてや体力に自身の無い自分にとって、消防署というイメージは全くといって良いほどありませんでした。しかし、よく考えてみると、高校で見たパンフレットには救急車に乗った救急救命士の姿が写っていた（絵）訳で・・・、救急車は消防署にあるし・・・救急車＝消防署という発想があ頃なぜ思い付かなかったのだろうと不安になりながらも必死に資格取得へ向け、勉学に励みました。その甲斐あって、平成12年の国家試験に無事合格することが出来ました。

卒業後、一旦実家のある島根県に帰ることを決めた私は、採用試験を目標に勉強と体力作りをしていました。無職ではいけないと思い、特別養護老人ホームへ就職し、毎年専門学校から送って頂いていた消防署の採用試験情報を参考に、時期になれば消防署の採用試験を受ける日々が続きました。

☆介護施設で感じた命

私が働いていた特別養護老人ホームでの業務と言え、おむつ交換や食事の介助など、救命士とは掛け離れた仕事内容でしたが、何かつながるものがあると信じ働きました。また、入所者の老人さんから優しい言葉をかけてもらったり、一緒に手遊びをしたり時には将棋をしたりと、家族の様な関わりを持たせていただき、今思えば充実した生活を送っていたと思います。ある入所者は、「わたしはもう80まで生きてけえいつ死んでもええ。死んだ女房の所へはよ行きたい

わあ。」と言っていました。また別の入所者は「わしは独り身だけえ寂しいのう。死ぬ時はあんたらあが看取ってくれりゃ幸せだ。」等と言っていました（絵）。老人ホームでは、常に死と隣り合わせの状態でした。数ヶ月に何名かの入所者は、家族に看取られながら、また介護員に看取られながら亡くなっていくのです。私が担当していた方が亡くなられたこともありました。体は不自由なもの、元気に会話をし手遊びをし（絵）、時には本当の家族のように親身になって話し接して頂いた方々の老衰していく姿を見ながら、「どんな元気な方でもいつかは亡くなるんだ。命って何だろう・・・」と、当時まだ若かった私もその時ばかりは深く考えさせられました。



☆何もできない自分・・・

私が救急救命士の資格を持っていることに対し、介護員の方々からは、「救急救命士ってすごいよね！施設で何かあったらお願いね！」等と普段からよく言われていました。正直今考えると、変な自信を持った自分がそこにはいたと思います。私が働いていた老人ホームは、病院と隣接していた為、入所者の定期受診等は施設看護師が車椅子を押し、病院へ続く歩道を通って行っていました。

ある日、昼食中に別の棟に入所中の男性がおでんのはんぺんを喉に詰め、それまで緊迫感のなかった介護施設が一気に騒然としました。施設看護師も老人の背中を一生懸命叩くのですが、異物除去には至りません。そんな時、食事の介助をしていた私のもとへ「青木君来て！！」と介護員が呼びに来ました。「〇〇さんがはんぺんを詰めて、え〜っと・・・」、と介護員も慌てた様子です。正直私はどうしたらよいのか頭の中が真っ白になり、急いで駆けつけたのはいいものの、処置という処置はできず呼吸と脈を観察しながら隣接する病院へストレ

ツチャーを押していくのが精一杯（絵）。結局その方は、数日後に亡くなられました。施設看護師や介護員からは、「あの時青木君がいてくれたから安心だった。」などと言われましたが、私の頭の中には、何もできなかった悔しさや腹立たしさ、とにかく言葉では言い表せない変な感情がこみ上げてきました。実際、救急救命士という資格を持っているだけで、何もできなかった自分を後悔し、亡くなられた入所者のご遺体が施設へ帰ってきた時、顔を見ることができませんでした。「何もできなくてごめん。苦しかったよね。」そんな思いで一杯でした（絵）。

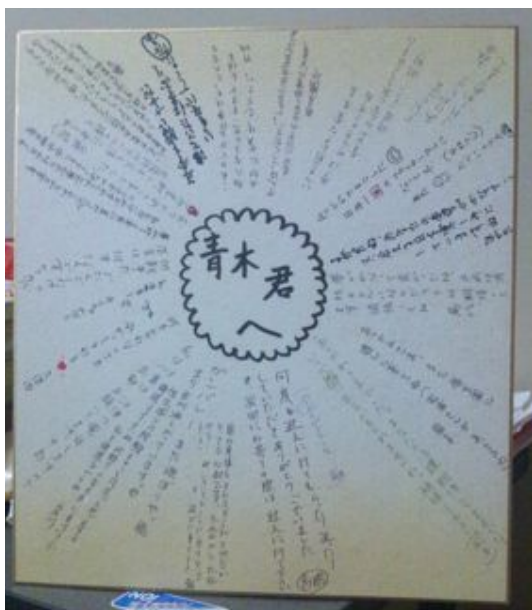
老人ホームで数年間働いているうちに、職場の雰囲気や仕事にも慣れ充実した毎日を過ごしていました。しかし、この施設で経験した事や、高齢で亡くなられていく入所者の方々、その家族の姿を見ているうちに、自分の夢が何なのか再び考えさせられた気がします。

老人ホームでは、入所者の健康状態に少しでも変化があると、直ぐに家族や親族等に連絡を行います。入所時から意識状態も悪く、経管栄養で生命を維持している方も多々おられます。そんな方々が肺炎を併発したり、高熱が出た時等は、近くに住む家族、親戚がすぐにやってきます。私の担当していた入所者の容体が急変した時も、入所者の娘夫婦が県外から数時間かけてやってきました。私は施設看護師が娘夫婦に状況を説明する場に立ち会い、一緒に話しをしました。その娘さんは、「お母さんは若い頃から頑張り屋さんだったけえ。もう苦しんでいいから楽になって。よう今まで頑張った。」と寝たきりで会話が出来ない状態の母親の耳元で声をかけていました（絵）。この入所者は数日後、家族に看取られながら永眠されました。娘さんも容体変化した時から既に覚悟をしていた様で、悲しみはもちろんですが、やっとお母さんは楽になれたんだという思いからか、少し安堵の表情が見られたように思えました。

老人ホームに入所している方の家族のほとんどは、自宅で十分な介護が出来ない等のやむを得ない理由がほとんどで介護施設に入所希望を出されます。状態も自立した生活が困難な方、いわゆる要介護度の高い方がほとんどです。それ故、家族の心情としては、家で最後を看取るといった選択よりも、老人ホームで安心した生活を送り、最期を看取るといった選択肢を選ばれる方がほとんどのように思います。ある意味、いつか訪れるであろう「死」について、ある程度受け入れる覚悟が出来ているのだと思います。

老人ホームでの生活を送りながら、私は毎年10カ所くらいの消防職員採用試験を受けました。地元島根県内はもちろんのこと、全国各地の試験を受けました。地元で就職したかった私は、現在在籍する江津邑智消防組合（当時、江

津市他7町村消防組合)へ合格することができ、それまで働いていた老人ホームの方々にもとても喜んで頂きました。



老人ホームの職員から頂いた応援メッセージの入った寄せ書きです。

今でも自宅に飾ってあります。何かあればこのメッセージを読み返し、元気をもらっています。

☆事例1：救命できない悔しさと、家族の悲痛な想い

ひとり立ちを許可して頂いたものの、まだ経験の浅い私にとって先輩救命士が休みの日はとても不安が付きまといました。ある夏のよく晴れた日のことでした。1級河川を管内に持つ私達の職場には、時期になると各地からサイクリング競技をしに多くの方がやってきます。私の勤務する消防署からも、ベランダに出るとその姿が見え、かなりのスピードで道路を走行していました。競技用自転車に乗り、ヘルメットも本格的だなあと思いながら、私達が昼食の準備をしていた時、「ブーッ！！ブーッ！！」と救急救助指令がかかりました。

すぐに出動準備をし、救助隊と共に出動中、「サイクリング中の男性が、高さ約5mの橋から欄干を飛び越え転落し、小川の中で倒れている。」と情報が入りました。現場は勤務する消防署から10分程度の距離でしたが、周辺にはサイクリング仲間が数名立っており、橋の下を見ると、ある1人の男性が小川の中に入り傷病者に心肺蘇生法を行っていました。小川は水深も浅く流れも緩やかなため、私達救急隊は橋の袂から歩いて小川へ降りました。そこで見た現場の光景は今でも頭の中から離れることはありません。傷病者はまだ若い男性で、競技用の自転車のペダルが足に固定されたまま小川へ転落していました。バイスタンダーCPRを行っていた男性は、たまたま競技に参加していた医師であり、傷病者の後ろを走行していたようで、救急車にも同乗されました。傷病者の男性は、全身に損傷が激しく心肺停止状態であり、人工呼吸をしても頭部の割創

から血とともに空気が噴出してくる状態でした。この男性は県外在住の方で、サイクリング仲間の話では、妻と高校性位の娘がおり、事故を聞きつけ既に搬送先の病院へ向かっているとのことでした。処置を行いながら病院に到着し医師に引き継ぎを行った後、この男性の家族が待合室にいるとのことで、現場から同乗して頂いた医師と共に状況説明に行きました。家族は詳しい状況を知らなかった様子で、自転車で転倒して怪我をしたとしか聞かされていなかった様でした。高校生位の娘さんは携帯電話で話をしたり、傷病者の妻も待合室の椅子に座り時折娘と笑顔で話をしていました。

私と医師が救急室から出て傷病者の状況を話した瞬間、2人の顔色は真っ青になりその場に膝から雪崩れるように倒れました。その後、2人は救急室内に呼ばれ、医師から死亡確認を宣告され、変わり果てた傷病者の姿を見て泣き叫び、立つことができなかったのを今でもよく覚えています。その光景を見ていた私は、一瞬どうしたらよいのか分からなくなりました。それと同時に救命できなかったことに対しての悔しさ、家族の悲痛な思い、今までに感じたことのない感情がこみ上げてきました。

これが救急現場なんだ・・・。この日は正直仕事が手につかず、傷病者と対面した時の家族の姿が忘れられませんでした。



現場再現絵

☆事例2：救急隊のおじさん助けてよ！！まだ生きてたいよ！！

消防の仕事にも大分慣れ、自分の出動した事例に対して先輩方と共に日々検証し訓練に励む日が続きました。

この事例は私が救急隊長として出動し、今でも時々思い出す忘れられない事例です。管轄する学校の男子生徒が体育の授業中、急に倒れたという通報内容で出動しました。状況から常に最悪のケースも考えながら資器材の指示をし現場へ向かいました。現場に到着すると、教員が数名グラウンドに集まっており、傷病者らしき生徒が中央に倒れていました。遠目で見た感じではあるものの、直感的に何か嫌な感覚に襲われました。関係者である教員から、走っていたところ急に倒れたと聞きました。観察をしながらすぐに車内へ収容し搬送を始めた直後、容体変化が起き、あえぎ呼吸（しゃくり上げるような呼吸）が起きました。「救急隊のおじさん、何とか助けてよ！！」私には、ストレッチャーに横たわる彼がそう言っているように見えました（絵）。その直後から心肺停止状態となり、処置の甲斐なく搬送先病院で息をひきとりました。

駆けつけた家族の泣き崩れる姿、以前も同様なことがあったな・・・と、またしても命を救えなかったことに対し悔しい思いで一杯でした。

家族の姿や亡くなられた高校生の姿を、救急隊長として後輩である隊員達に見せるべきなのか。しかし、後輩にも消防士として命の尊さを目に焼き付け、何か感じるものを持って欲しいと判断した私は、隊員達も救急室の中に入れました。その目には涙が滲んでいたように私には見えました。帰りの救急車の中で隊員達と話しをしながら帰りましたが、若い人の死を自分自身受け入れることがなかなかできませんでした。

☆最後に

これまでの私は、高校時代に目にした「救命」という言葉のカッコよさに惹かれ、その道に向かって必死に進んできた。簡単に表現するとそんな人生を歩んで来たと思います。また、救急救命士という仕事へ私を引き寄せたのは、老人ホームでの入所者との出会い、また窒息に対し何も出来なかった入所者への想い、老人ホームの職員の皆さんの励ましたと思っています。老人ホームで経験し感じた私自身の不甲斐なさ、それが消防に入って間もない私を育ててくれました。そして、消防に入り更につらい症例を経験し、こらえきれず帰署後に隠れて悔し涙を流したこともあります。

老人ホームで経験した老衰等による死を、仮に「準備できた死」と表現するのであれば、救急現場で経験する死は「突然の死」であり、その突然の死亡宣告を突き付けられた家族の心情や、傷病者の無念の想いを考えると悔しさで一杯になります。しかし、その感情を避けるのではなく、大切に捉えることによって、その先に必ず得られるものがあると私は信じています。

これから専門学校を出て、救命士を取得しようと頑張っている皆さんの中には、病院実習等で辛い経験をされた方もいると思います。死を目の当たりにされた方もいるのではないのでしょうか？そんな時、皆さんは何を感じましたか？実習とは言っても、何も感じなかった方はいないのではないのでしょうか。私は、皆さんがこれから経験されるであろう現場の厳しさや過酷さ、精神的な辛さ、その感情を大切にして欲しいと思います。傷病者を家族のような存在と考えるのはいけないのかもしれませんが、1件1件の救急事案を大切にして欲しいと思います。そして、その経験から検証をし、次につなげようとする気持ち。それが絶対に必要だと思っています。ただ業務をこなし、「今日も一日が終わったなあ・・・。疲れたなあ。」と毎日過ごすのではなく、「あの時もっと出来たことがあったんじゃないか。」と常に考えることができる救命士になってもらいたいと思います。

救急に限らず、現場は全て精神的にも辛いと思いますが、自分が搬送した傷

病者から「あの時はありがとうございました。」と手紙を頂いた時や、消防署を訪問され元気な姿を拝見した時、とても嬉しくなります。私が頂いた手紙は、今でもファイルに入れ大切にしています。辛いときにはこれらの手紙が、また頑張ろうという気にさせてくれます。



先日は暑い中、搬送して頂きありがとうございました。私は観光中、岩で足を滑らせ怪我をしたものです。膝の付近がパッキリと割れ、不安で一杯だった私を、若い救急隊3名の方が汗水流して重たい私を必死に搬送して下さいました。その姿はたくましく、勇敢であり、とても安心しました。現在、私は地元の医療機関に毎月1回通院し、今では歩けるまで回復しました。この経験は一生忘れることの出来ません。

お礼文から抜粋

それと、私には大切な家族、仲間がいます。消防の仕事は休みの日でも災害等の呼び出しや、研修等で家を留守にすることが多々ありますが、そんな私を理解し笑顔で送り出してくれます。もちろん家族との時間は大切に過ごしますが、そんな家族や仲間の存在が一番の癒しです。



作：妻と長女

最後に、まとまりのない文章で上手く伝えることが出来たか不安ですが、私

の経験談が皆さんにとって今後の糧になれば幸いです。同じ現場は二度とありません。経験したことを検証し、次につなげていける消防職員になっていただければと思っています。